戦国城下町岩倉の復元的考察
――調査の成果と地籍図の検討から――

金子 健一

Ⅰ はじめに

近年、城郭・城下町研究は、織豊期以降、近世を中心として進境著しいものがあり、各地で都市構造、地域構造の解明に大きく貢献している。その研究手法についても、発掘調査の成果はもとより、文献史料・地籍図・空中写真等、様々な方面からのアプローチが試みられ、そこから実に様々な事実が判明している。しかし、そうした中で戦国期、織豊系城郭成立前後の城郭、城下町については、近年増加の傾向にあるものの、以然、研究事例は少なく、その実態は明らかとは言い難い状況である(1)。尾張においては、信長期の清須城(2)や今回取り上げる岩倉城(3)がそれに該当するわけだが、両者とも最近ようやく解明の兆しが見えてきた段階である。そこで、一昨年度より進められてきた岩倉城の発掘調査も、本年度でその主要部を終えるため、その成果と地籍図の検討を中心に、城郭構造の復元を城下町の景観復元も含めて考えていきたい。

さて、ここで岩倉城の沿革について簡単に触れておきたい。築城の経緯については不明な点が多いが、文明8年（1476）頃、当時尾張の守護所であった下津が、織田氏の内紛によりその機能を失った後、文明11年（1479）頃、織田敏広により築城されたとする説(4)がある。その後、落城までの約80年間、守護代織田氏の居城である清須城とともに尾張を二分するもう一大勢力の拠点として繁栄することとなる。しかし、永禄2年（1559）織田信長

	幅（m）	深さ(m)	滞水状況	遺物	備考
堀 A	10	3	有	陶磁器、土師器が少量	断面箱形
B	23	4以上	有	〃 〃	断面箱形
C	20	7	有	陶磁器類がごく微量	断面箱形
D	12	3.5	有	〃 が少量	断面箱形
E	8～9	2.5	無	〃 が少量	断面V字
F	8～9	2.5～3	無	〃 が少量	断面緩やかなV字
区画溝G	5～6	2.5	有	新しい溝：土師皿、木製品多量 古い溝：	一回掘り返しあり
H	3	1.7	無	新しい溝：土師皿、陶磁器多量 古い溝： 〃 木製品	一回掘り返しあり
I	3	1.0	有(西溝は無)	西溝： 〃 〃 少量 東溝： 〃 〃 多量	中央に土橋状施設あり

表1 堀・区画溝の規模と概要

により滅ぼされる[5]と、その後再興することなく、近世は犬山街道沿いの在郷町として現在に至っている。以上、ごく簡単に紹介したが、ここで注目されるのは、岩倉城がその落城以後の経緯から城郭、城下町研究における編年上の一指標となり得るということである。つまり、落城の年代が永禄2年（1559）と明らかな上、取り壊された後、跡地が大規模に再利用されることなく現在に至っているため、発掘調査においても、地籍図の地割においても、永禄2年段階の戦国城下町の姿がかなり純粋な形で検出され得るのである。このように岩倉城は、戦国城下町の一つの下限を示す好資料であることを付け加えておきたい[6]。

II　調査の成果

まず、発掘調査による最大の成果は、6本の堀と3本の区画溝を確認したことにより、城の東西方向の規模、及び内部構造の一部が判明したことである。全体の規模は五条川を挟んで堀AからFまで366m、うち主体部のある西岸部が224m、新たに確認した東岸部が90mである。個々の堀や区画溝、及び曲輪の規模は別表に示した通りである。以下、個々の遺構、曲輪を概観していきたい。

最初に、堀A・Bについては、当初、幅45mの一本の堀と考えられていたが、あまりにも幅が広すぎること、AとBの間隔（曲輪1）が15mと広いこと、後でも述べるが東側の堀CとDに対応させる形で二重堀となることから別々の2本の堀と考えるに至った。一方、堀C・Dについては、従来この東側に関しては五条川を守りの要、つまり堀としての利用を想定し、西側の堀A・Bに相当する堀の存在は全く考えられてこなかった。これは地籍図上にその痕跡をほとんど止めないことからも疑う余地は全くなかったといってよい。しかし、今年度の調査において、五条川と平行する形で2本の堀が確認されたことにより、従来いわれてきた城郭構造のプラン[7]は大きく見直しを迫られることとなった。と同時に、五条川に対する評価もやはり見直しが必要となってきたのである。すなわち、川を自然の要害としてとらえるだけでなく、むしろ、一つの輸送経路、つまり、「道」としてとらえる発想が必要となってきたのである。というのは、現在では到底考えられないような小河川が、当時重要な水上交

曲　　輪	距　離(m) (東西方向)	備　　考
1　(A・B間)	15	無遺構、2より約2m低く水没の可能性あり
2　(B・G間)	33	溝、土坑を若干検出
3　(G・H間)	43	桶組井戸2基、土坑等検出
4　(H・G間)	36	ピット、土坑多数検出 焼土、炭化物の広がりを確認
5　(C・D間)	20	無遺構、土塁等の存在の可能性あり
6　(E・F間)	72	溝、ピット、土坑多数検出
主体部(A・D間 堀の幅含む)	224	
全　体(A・F間 堀・川の幅含む)	366	

表2　曲輪の規模と概要

通路として利用されていたことは決して珍しいことではなく、五条川もその例外ではないと考えられるからである[8]。つまり、川伝いに来襲する敵に対する防御、これが、五条川に沿う形で2本の堅固な堀を築かせた最大の理由と考えるのである。

では、これら4本の堀に挟まれた空間、曲輪1、5はどのように利用されていたのだろうか。ここで1つ考えられるのは、16世紀中頃以降出現するといわれる帯曲輪である。しかし、岩倉城の場合、調査区内で見る限り、両曲輪とも無遺構であること、曲輪1は曲輪2より2mも低く、堀の増水時には水没の可能性もあることなどを考えると、帯曲輪のような独立した空間というより、土塁等が存在する防御施設の一部と理解した方がより妥当であろう。また、後でも少し触れるが、岩倉城末期における城域の拡大、堀割掘削等の防御体制の強化に伴う副産物と考えることもできるであろう。このように、五条川西岸の主要部、いわば「本丸」は二重堀に囲まれた堅固な姿であったことが想定されるが、ではこの「本丸」の内部（曲輪2～4）はどのような構造だったのであろうか。

この「本丸」内に関しては、今年度までの調査により、3本の溝と若干の遺構の存在が明らかになっている。その中で、3本の溝が持つ意味は重要で、「本丸」内を3分割する形で南北に走る溝G・H、更に、この2本の溝をつなぐ形で東西方向に走る溝Iの存在は、そこにこれらの溝により区画された特別な空間、曲輪の存在を連想させるのである。この空間（曲輪3）の規模は、東西43m、南北方向は地籍図から推定すると約100mとなり、南北方向に細長い曲輪であったことが窺われる。また、溝G、Hからは陶磁器、土師器、木製品など種々雑多な遺物が大量に出土することもその特徴の一つで、堀

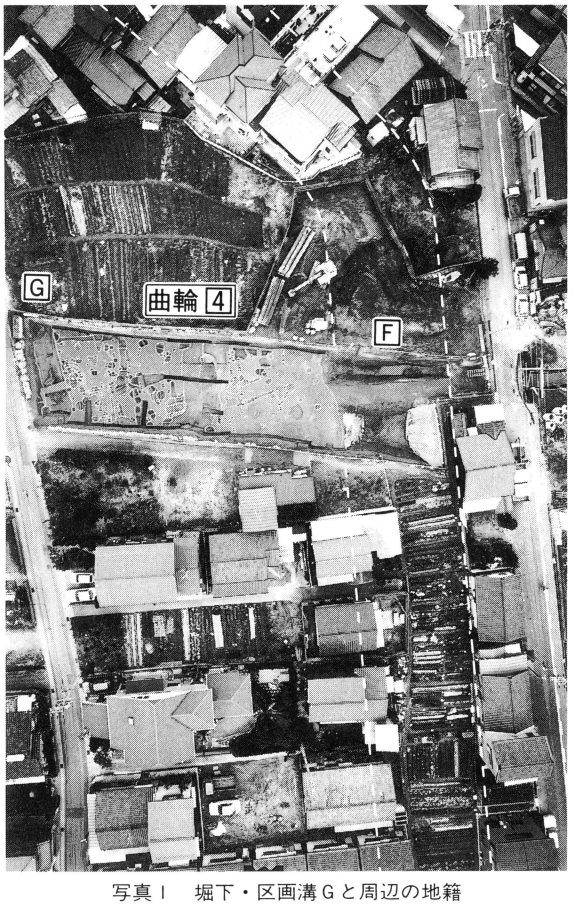


写真1　堀下・区画溝Gと周辺の地籍
堀Fから下へ伸びる畑に注目
（……は推定ライン）

A～Dがその規模に比して少量しか遺物を含まないことと比べても、曲輪3の特殊性は容易に想像されよう。更に、溝Ｉは中央やや西寄りに土橋が確認され、北方の出入りを確保していたことが考えられる。しかし、この曲輪3については、発掘区が曲輪の北端部にあたることから、具体的な内部構造については不明な点が多く、井戸が２基検出された程度で、建物遺構の配置等の詳細な様相は判明していない。なお、溝Ｇ、Ｈには、一度掘り返しを受けた痕跡があることから、本丸内にも曲輪1、5の出現と時を同じくして拡張、防御の強化等改修の手が加えられた可能性は充分考えられるであろう。一方、曲輪3を取り囲む形の曲輪2・4については、調査面積が狭小なこともあり、詳細な内部構造は必ずしも明らかではない。ただ、曲輪4に関しては、曲輪3寄りの西半部にピット・土坑・溝等の遺構が密集している上、多種多様な遺物が豊富に出土していることから、何らかの城郭関連施設が存在したことは確実で、西側の曲輪2を含め今後の更なる検討が待たれるところである。なお、この曲輪4の西半部には、城の存続期間内のものと思われる整地が認めわれることから、少なくとも２つの生活面が存在することは確実であり、これも前述の改修の存在を裏付ける重要な事実といえよう。

最後に、五条川東岸の堀Ｅ、Ｆについてであるが、従来、五条川を城の東限として、それ以東には城域は広がっていないという考え方が支配的であり、地籍図上でもこの２本の堀の存在は確認されていなかった。そのため、全く予想外の遺構であったが、２本の堀とも出土遺物からみて、岩倉城に伴うものであることは確実であり、後述する地籍図の検討から、東岸にも堀により囲まれる軍事的な空間の存在が想定されることになった。そして、この空間、曲輪6についてもその位置的条件から、やはり堀Ｃ、Ｄと同様に「道」としての川を意識した結果の産物であることが考えられ、軍事的緊張の高揚に際し、城域拡大の一環として新設された可能性が高い。(9)

さて、以上、今年度までの調査から判明した事実に若干の考察を加えつつ概略を述べたが、調査地点の関係上、その大半は城郭主体部についての記述とならざるを得なかった。そこで次に、これらの成果を踏まえつつ、地籍図の検討をもとに、城郭構造はもちろんのこと城下町の景観についても論及していきたい。

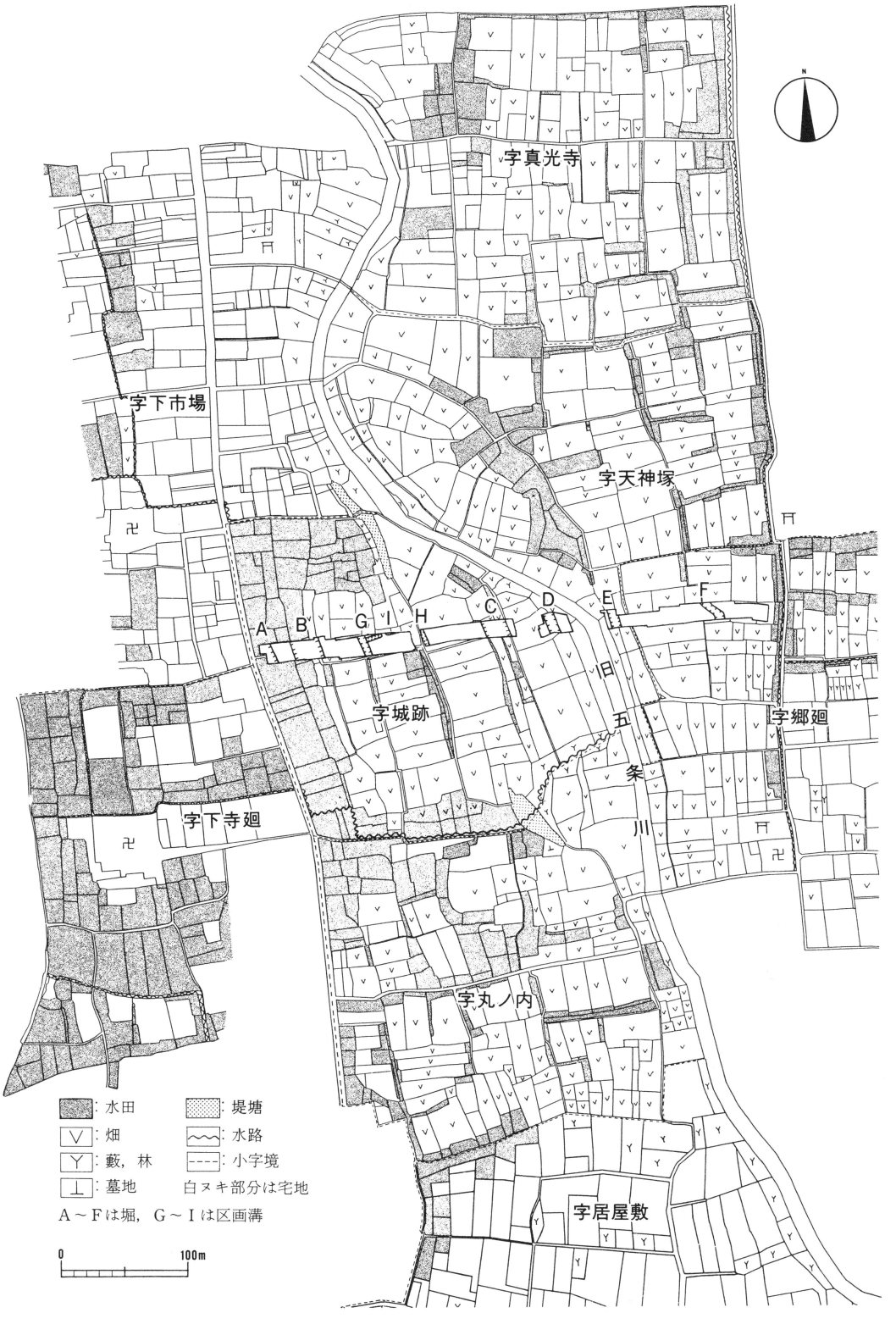
Ⅲ　地籍図の検討

今回、地籍図を検討するにあたり利用したのは、明治17年、同21年作成(10)のものである。作業は、21年のものをベースに、17年の地目を加味しながら、米軍撮影の空中写真を併用して行った。以下、字ごとに検討を加えていきたい。

まず、岩倉城の中心部にあたる「城跡」部分では、従来指摘されてきた箇所も含め、堀

A～D、区画溝G、Hに相当する南北方向に伸びる水田、畑の分布を確認した。最初に堀A・Bについては、該当する水田が一本の太いラインとなって現われている。しかし、これは前述の調査の所見から2本の堀が一体化したものと判断した。では、この堀A・Bが調査地点からどのような形で伸びるのかについてであるが、まず北方は「城跡」の北西の字境をコーナーとして東へ曲り、五条川の少し手前「堤塘」と書かれた細長い高まりの部分[11]で終っていると考えられる。南方へは、堀Aがそのまま「丸の内」方面へ伸びる可能性があるのに対し、堀Bは南の字境まで伸びた後、水路に沿う形で東へ折れ曲り、やはり「堤塘」と書かれた部分で終っていることが窺われる。このように堀Aと堀Bが分岐する根拠としてあげられるのは、「丸の内」へ続く水田と南の字境を東進する水田が、調査地点前後の水田に比べ幅が狭くなっていること、にもかかわらず、両方向へ切れずに続いていることの2点である。次に堀Cについては、前述のように当初、地籍図の水田の分布からはその存在がはっきり確認できなかった。しかし、調査の後、再度地籍図を検討した結果、調査地点から南へ伸びる2本の細長い水田、及びそれに挟まれた畑地、北方については北西方向へ折れ曲る形の水田が相当するとの考えに至った。ただし、この堀Cも「堤塘」の手前で終わり堀A・Bとは接続しないものと考えられる。また、堀Dについても調査後の再検討の結果、北方については調査区の十数m先、旧五条川の手前で終わり、南方へは五条川沿いに細長く伸びる畑地部分が相当するとの考えに至った。そして、この堀C・Dは南の字境を走る水路部分でつながり、西へ折れてやはり「堤塘」部分で終っているものと判断した。

このように、堀A～Dの囲繞状況を推定したわけだが、その他「城郭」内で二点、地籍図の検討からその存在を推定し得たものがある。1つは本丸部分の出入口（虎口）の位置で、これは、南側が正面[12]（大手）で北側が背面（搦手）にあたると判断した。なぜなら、西と東については、それぞれ後背湿地と五条川を控えており、円滑な通行が困難なことから、出入口の存在は考えにくいからである。では、具体的な位置と形態についてであるが、位置は前に述べた南北の「堤塘」の部分にあたるものと考えられる。というのは、堀A～Dに相当する水田及び畑が全てこの「堤塘」の前で終っており、この部分のみ城の内外をつなぐ形で、土橋状に切れているからである。また、虎口の形態に関しては、地籍図の検討からでは明らかにし得ないが、城の存続期間から考えて比較的単純な構造のものであったと考えられる。類推できる今一つの点は、堀と川との接続の問題である。というのは、堀の中に帯水状況を示すものがあり（表1参照）、その供給源としてまず考えられるのが五条川だからである。しかし、これには以下のような問題点が指摘されることから、いずれの堀も五条川とは接続していないと考えるに至った。まず一つは、防災上の問題で、仮に



第1図　岩倉城周辺地籍図（明治21年）（1：2500）
（堀・溝の位置は痕跡にあたる水田に合わせてあり、それぞれの間隔は実際とは異なる場合がある。）

接続しているとすれば、五条川の増水、氾濫時には城本体、城下町への水害の波及はまぬがれないということである。また、滞水状況を示す堀の埋土が、流水ではなく止水の状況を呈していることも非接続の傍証となっている。更に、清須城においても、前期、後期を通じて堀と川は接続していないことが調査で確認されており、同時期の城として、示唆に富んだ事実といえるであろう。

では、次にこのような主体部を核として、城下町が展開していたであろう周辺地域について検討を加えていきたい。

まず、「城跡」南側に隣接し、非常に関連深い字名を持つ「丸の内」部分では、前述のように「城跡」部分から堀Aがさらに南下する可能性及び、水田が帯状に巡るブロック状地割の存在を確認することができた。ただ、堀Aについては「城跡」から続いていることはわかるものの、その南端部がどこまで伸び、どのような形で終わるのか、中核部分である「城跡」、「丸の内」部分を囲い込んでしまう可能性があるのかないのかまでは判読不可能であった。

一方、ブロック状地割については、清須城下町において、これと類似した方形地割を溝を巡らせた寺院の痕跡と想定している。[13]しかし、この「丸の内」の場合、字名や「城跡」に隣接する位置から考えて、周囲に溝を巡らせた屋敷地の存在を考える方がより妥当であろう。[14]更に、この方形区画の分布を検討すると、小規模ながらも集住化の進行が認められると同時に、城郭主体部と同様の規格[15]が屋敷地にも及んでいることを確認することができる。具体的には、「丸の内」内を南北方向に並ぶ一町四方の二つの大区画ⓐ、ⓑと、約半町四方の三つの小区画ⓒ～ⓔに分け、大区画はその中を更に溝等で分割するといった構造が読み取れるのである。そして、それらの区画が「本丸」の南に隣接する形で、整然と配置されていた様子も窺い知ることができる。また、この大小の区画の方向性は、調査で確認した主体部の堀や区画溝の方向性（N－15°－W前後）と大概一致することも留意すべき点で、両者の構造が五条川の自然堤防の方向に規制されたものであることが想定されるのである。[16]更に、南方から城へ至る道（第2図参照）が「丸の内」に入る部分で不自然に屈曲していることも注目すべき点で、この部分まで堀Aが伸びているかどうかは別として、ここに城域内の中核部分の出入口（虎口）が存在した可能性が考えられるのである。

次に、「丸の内」同様、関連深い字名である「居屋敷」部分では、地割に何ら特徴が見られず、城下構造は推察し得なかった。しかし、字名や位置から考えて、地籍にはあらわれない町屋、市場等が道沿いに存在した可能性が高く、[17]城下の一部と考えて問題ないであろう。

「城跡」北方の「下市場」については、後世、犬山街道沿いに町屋が発展したため宅地

化が進行しており、地割は当時の状況を反映していないものと考えられる。ただ、ここも「居屋敷」同様、字名や位置から考えて城下に含まれていた可能性は非常に高く、やはり町屋、市場等の存在が考えられる。

「城跡」南西部の「下寺廻」については、元来、低湿な地形ということもあり、城下構造とは無関係に水田が密集しているようで、城下構造を示す地割の存在は確認できなかった。むしろ、この低湿地が岩倉城西辺の防衛ラインとして有効利用されていたことは確実で、当時も湿地及び水田が広がっていた状況が想定される。

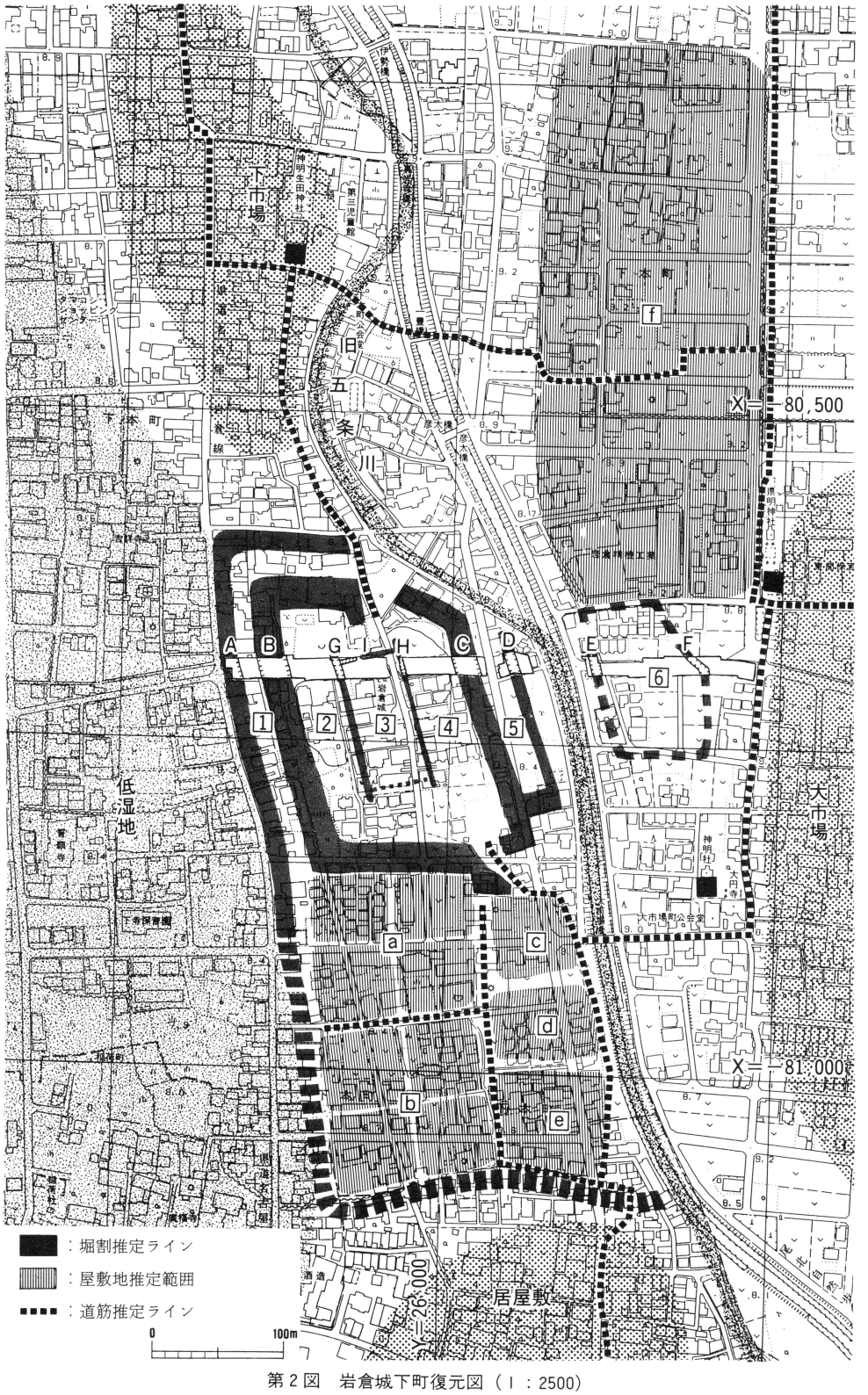
では、次に五条川東岸部について見ていきたい。まず、城の北東にあたる「真光寺」、「天神塚」部分については、「丸の内」同様ブロック状地割がかなり広範囲にわたり、連続して分布している。その推定範囲は、南北約400m、東西約170mで、曲輪6も含めた規模は城郭主体部と屋敷地a～eを合わせた規模に匹敵するものである。しかし、ここでは「丸の内」部分のような一定の規格の存在が見い出せない上、城郭主体部に対する位置的条件は西岸の屋敷地に比べて劣るため、前者が従属性の強い上級家臣等の居住地域とすれば、こちらはそれ以外の、依然独自性を保つ中、下級家臣の居住地域に比定することができよう。また、「真光寺」という字名から寺院の存在も窺われ、屋敷地fのブロック状地割の中に含まれている可能性も考えられる。

最後に「郷廻」部分についてであるが、ここは、調査により堀E・Fが確認され、曲輪の存在が想定される部分である。この曲輪6については、前述のように水田、畑の分布等明確な地割上の痕跡はとどめていない。それ故、その推定は堀E、Fから南北に伸びる畑とそれに並走する道及び、曲輪1～5の方向性と南北方向の規模に依拠せざるを得ず、あくまで想像の域を出ないものである。なお、この曲輪6以外、「郷廻」部分では特徴的な地割は確認できなかったが、位置的条件や「郷廻」の属する「大市場」という町名から、町屋、市場が散在していた状況が想定される。

その他、城下町の重要な構成要素である寺社や街道の様相については、資料が不足していることや検討が不充分なことから、必ずしも明らかになったとは言い難い。よって、ここでは概略を述べるにとどめたい。

まず、神社については第2図で示した三社のうち、神明生田神社が天文23（1554）年の紀年銘資料を持つことから、[18]当時既に存在していた可能性は充分考えられる。また、神明生田社と神明社が五条川の渡河点に近接していることや、県明神社を含めた三社全てが市場地名内に属していることから、渡河点とそれに近接する神社、そしてその周辺に展開する市場、町屋といった構造が看取できるのではないだろうか。

一方、寺院については、当時から存続しているといわれる6寺院（証法寺、龍潭寺、誓



第２図　岩倉城下町復元図（Ｉ：2500）

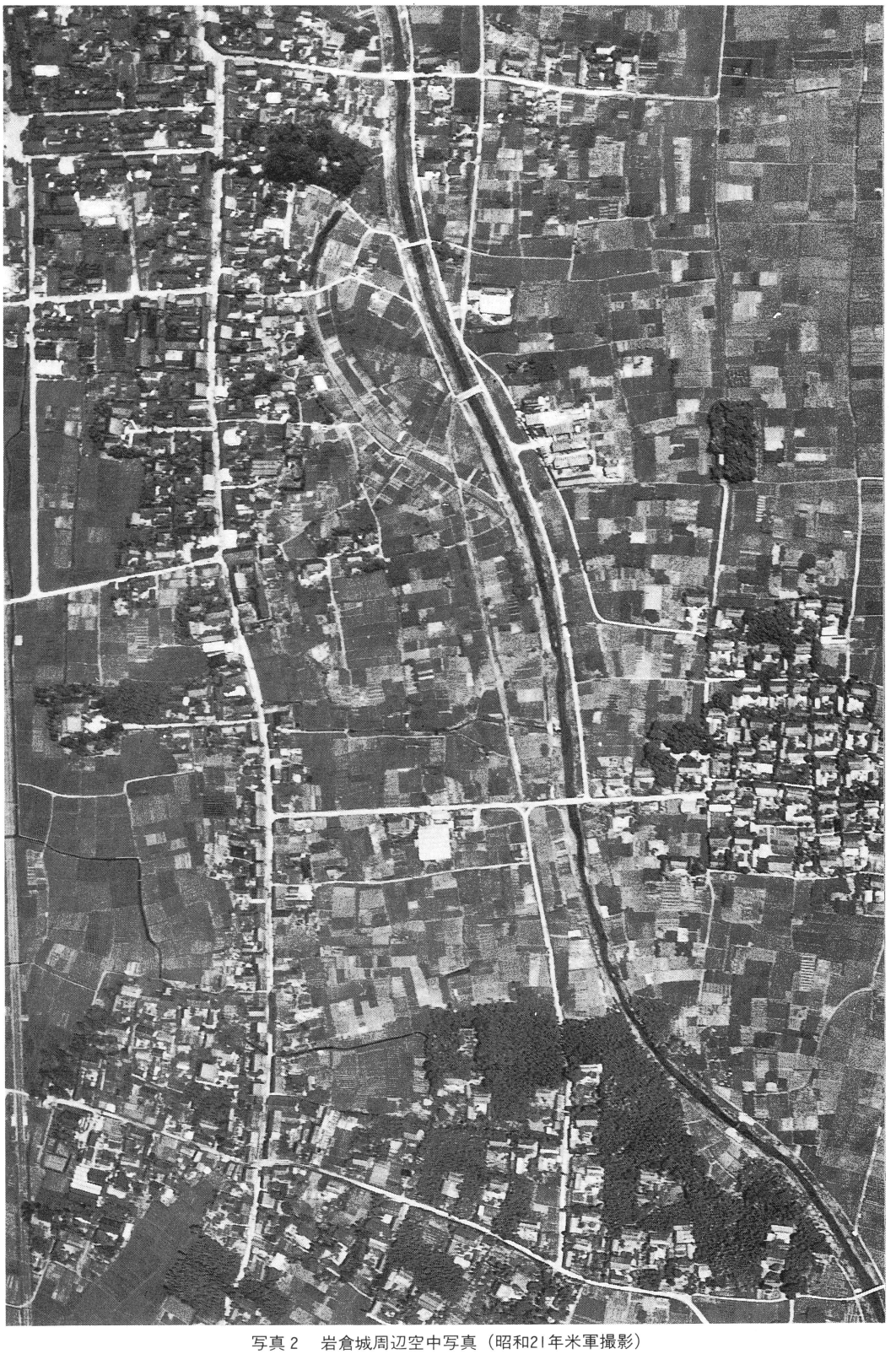


写真２　岩倉城周辺空中写真（昭和21年米軍撮影）
この写真は国土地理院発行の写真番号97－Ｅ－5－86を使用したものである

願寺、吉祥寺、松栄寺、浄正寺）の他、落城後、他地域に移転したという５寺院を含め11寺院の存在が伝えられている。[19]しかし、現存する６寺院の内、松栄寺、証法寺、龍潭寺の３寺院は、現在地が城下町のかなり北方（岩倉城の中心部から約１km）に位置することになり、散在域の範囲が確定できないとはいうものの、神社の所在地と比較しても中心部から離れすぎであることは否めない。また、第２図中に見える誓願寺と吉祥寺についても、現在地は城郭西方の低湿地の中にあたることから、往時の位置とは異なるものと考えられる。

最後に、街道については、当時の状況を伝えるものは全くなく、岩倉市内を通っていたといわれる中世鎌倉街道の伝承ルートが知られるのみである。[20]また、現在、堀Ａ沿いに南北に走る犬山街道は、落城以後、近世の所作である可能性が高く、当時、低湿地であったこの部分を主要街道が通っていたとは考えられない。[21]その他、城下町内の主要道路についても全く推定の域を出ないが、自然堤防の方向や地籍図上の渡河点、神社の位置から第２図の如く復元するに至った。その中で、南から城に至る道筋については、その北端にあたる中核部分の出入口（虎口）の構造が地籍図上にあらわれていることや、屋敷地東辺に沿うように北上していることから、比較的精度は高いと考えられる。しかし、北から城に至る道筋については、地籍図上からは全く窺い知ることができず、自然堤防の方向と神明生田神社の位置に依拠してルートを決めざるを得なかった。その他、五条川東岸部の道筋についても、渡河点及び神社間をつなぐ形で、地籍図上の主要道路をそのまま図示するにとどまった。

以上、寺社及び道筋について概観したが、あまりに不明な点が多く、今後、主要街道のルートをはじめ、市場、町屋、寺社など各々の構成要素の結び付きをより広い範囲の中で検討していく必要があると思われる。

Ⅳ　岩倉城下町の復元　ーまとめにかえてー

さて、ここまで、発掘調査と地籍図の検討から判明した事実に、若干の考察を加えながら城郭・城下町を構成する諸要素の分析を試みた。しかし、遺構ごと、字ごとに細分化された状態では城下町の全体像を捉えるのは難しい。そこで最後に、これらの事実を総合してどのような城郭、城下町を再構築できるのか、それを中核部分と周辺部分に分けて考えてみたい。

まず、どれだけの範囲を中核部分とみなすかであるが、字名の「城跡」、「丸の内」の部分と考えてほぼ間違いないであろう。この南北500m、東西250mの周囲から隔絶された空間には、領主と近親及び上級家臣、直属商工業者が定着、集住し、最小単位の城下町を構

成していたのである。[22]その可視的な構造は、中核部分全体を取り囲む「外堀」の中に、守護所的色彩を残しながら戦国城郭としてさらに強固な構えとなった「本丸」部分、小規模ながらも、領主権力の浸透を示唆する“都市計画”に基づいた屋敷地群の両者が、南北に整然と配置されたものであった。

一方、町屋や市場が散在する周辺部分については、その範囲も構造も明らかとはいい難い。しかし、その骨格は、城北東の屋敷地群及び、市場地名部分に想定される町屋、市場の両者により形成され、前者には以然独自性を保つ中、下級家臣団が、後者には未だ権力に掌握されきらない民衆が散在し、共に“大きな城下町”の担い手となっていたのである。

そして、この二つの“城下町”が有機的に結合した姿こそ、戦国期、尾張北部の一大拠点であった岩倉城下町の実像であり、同時に尾張における戦国城下町の典型というべきものであろう。

以上、戦国城下町岩倉について、その景観復元を柱として論考を進めてきたが、筆者の力量不足もあり論じ残した部分はあまりに多い。今後、周辺地域のみならず、より広い範囲の中での類例との比較、検討が必要であり、そうすることによってはじめて、当地方における戦国城下町の様相、ひいては地域構造全体が一層明らかになってくるであろう。

この稿を成すにあたり、愛知県教育委員会遠藤才文氏、名古屋市見晴台考古資料館千田嘉博氏をはじめ、多くの方々から数々の有益な御教示を賜った。また、地籍図の閲覧に際し、岩倉市社会教育課の諸氏には度々御配慮頂いた。末筆ながら記して厚く感謝する次第です。

註

(1)戦国城下町の代表的な研究としては、小林健太郎『戦国城下町の研究』(大明堂　1985)、小島道裕「戦国城下町の構造」(『日本史研究』257　1984) 等をあげることができる。

(2)信長期の清須城については、中部よし子「織田信長の城下町経営」(『ヒストリア』82　1979)　前掲註(1)小島論文　梅本博志「信長期における清須城下町の様相」(東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－』研究報告編　1989) 等で論及されている。

(3)岩倉城については、小林健太郎氏が「大名領国成立期における中心集落の形成－尾張平野の事例研究による検討－」(『史林』48－1　1965、前掲註(1)小林論著の中に再録) の中で、城下町について若干触れている他、『岩倉市史』上巻 (1985) でも、築城から落城までの経緯及び城郭、城下町の構造について論及している。しかし、落城の経緯等からくる城自体の認識の浅さや文献史料の絶対量の不足が災いし、研究は停滞したままであった。

(4)この説は、「張州府志」や「尾張志」の記述によるものであり、前掲『岩倉市史』や『日本城郭大系』9 (新人物往来社、1979) ではこの敏広築城説をとっている。

(5)『信長公記」首巻「岩倉落城の事」

(6)このような事例研究については、小島道裕氏が「戦国・織豊期の城下町－都市の建設と移転－」(東海埋蔵文化財研究会『清須－織豊期の城と都市－』研究報告編　1989) の中で指摘された「廃城下町」研究の有効性と共通するものがあると思われる。また、このような研究上の利点は、城郭、城下町研究の分野だけでなく陶磁器類など当該期の遺物の編年研究にも大きな意味を持つものである。

(7)前掲『岩倉市史』上巻　P42の岩倉城想定図はその代表的なものである。

⑻五条川については『信長公記』首巻「二宮山御こしあるべきの事」の中に、「小真木山へは、ふもとまで川つゞきにて、資財、雑具取り候に自由の地にて候なり」とある様に、重要な水上交通路として利用されていたことが窺われる。

⑼城域の拡大等を必要とする軍事的な緊張が具体的に何にあたるのかについては、ここでは明らかにし得ないが、岩倉城末期が1550年前後の時期にあたることから清須の信長や駿河の今川氏の動向と無関係ではあり得ないだろう。なお、城域の拡大、防御の強化等、改修の存在を指摘する根拠としては、築城年代から想定される当初の姿がこのように大規模なものであったとは考えられず、むしろ旧来の守護所の形態を踏襲したものであった可能性が高いことがあげられる。このことは、地籍図上で「本丸」部分に守護所同様、一町単位の方形プランの存在が確認できることからも想定でき、前述した曲輪[1]、[5]の出現や区画溝G、Hの掘り返しとともに、改修の存在を裏付ける重要な事実といえよう。

⑽明治17年の地籍図は愛知県公文書館蔵のものを、同21年の地籍図は岩倉市公民館（社会教育課）蔵のものを使用した。

⑾「堤塘」とは堤防のことで、後世、岩倉城の土橋を再利用する形で築かれたものと思われる。北の「堤塘」については、現在も神社の境内にその痕跡をとどめている。

⑿『信長公記』首巻「浮野合戦の事」の中に「(前略) 此表、節所たるに依て三里上岩倉の後へまいり、足場の能方より浮野と云所に御人数備へられ (後略)」とあり、「岩倉の後」である浮野は城の北西にあたることから南を正面と考えた。このことは前掲『岩倉市史』においても指摘されている。

⒀方形地割部分を調査した際、溝の中から位牌、板塔婆、柿経等信仰関係の遺物が出土したことによる。前掲註⑵梅本論文参照

⒁このことについては、すでに小林健太郎氏が前掲註⑶論文で指摘されている。

⒂前掲註⑼参照。地籍図からは一町半四方の方形プランが想定されるが、堀割削割等改修の影響で築城当初の姿は必ずしも明らかではない。

⒃信長期の清須城においても、五条川東岸で一定の方向性（N－10°－E）と「町」単位の規格を持った周囲に溝を巡らす屋敷群の存在が確認されている。それらは、地籍図上では「丸の内」同様ブロック状地割を示しており、その中でも屋敷群南半に展開する「武家屋敷」地区の規格が約半町四方であることは、同時期の城として大変興味深い。

⒄この時期の町屋や市場は、まだ集住化も進んでおらず、地籍図上に明確な痕跡を残すほど発達したものとは考えられない。岩倉城下町の場合も他の戦国城下町と同様、道沿いの一本街村ないしは十字街村を呈するものと考えられる。

⒅前掲『岩倉市史』下巻　P170　生田神社所蔵の棟札に記されている。

⒆前掲『岩倉市史』上巻　P415

⒇前掲『岩倉市史』上巻　P342　この伝承ルートは岩倉市内を南下した後、第２図中の誓願寺の南方で東へ折れ、「丸の内」部分を横断し、図中の渡河点を通過するというものだが、低湿地や堀、屋敷地の存在を考えると、岩倉城の存続期間にはあり得ないルートである。しかし、当時の街道が自然堤防上を通っていたことは確実で、やはり近在にルートを求めるべきであろう。

㉑前掲註⑶小林論文及び、浅野弘一「尾張における中世城館の研究」(愛知教育大学歴史学会『歴史研究』35　1989) の中で両氏は、「犬山街道にそって短冊型土地区画を有する町並が形成されている」(小林論文) と述べておられるが、犬山街道自体には検討を加えておられず、やや疑問が残る。また、「短冊型土地区画」についても、註⒄で述べた理由により、近世以降の所作と思われる。

㉒前掲註⑶小林論文の中で、同様の構造のものとして、越前浅倉氏の城下一乗谷をあげておられる。